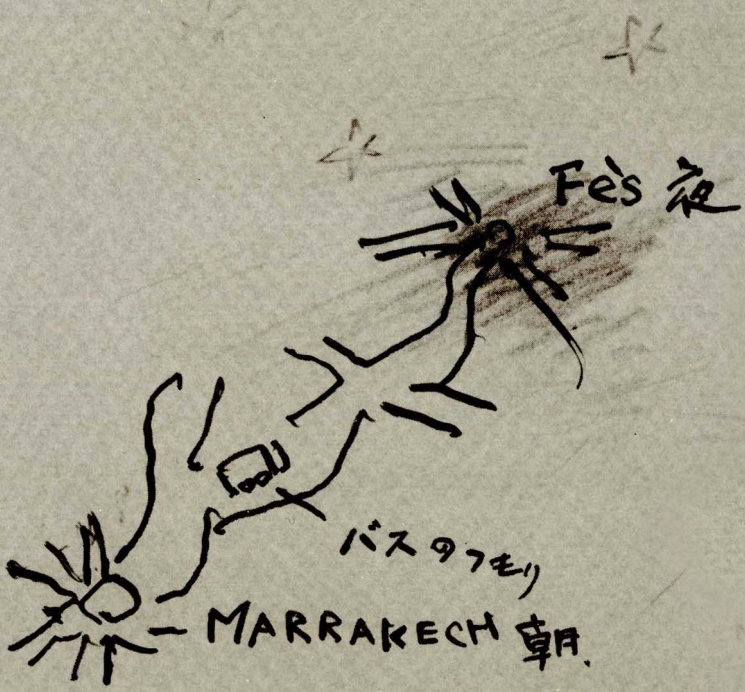

Fès 夜
バスのつもり
MARRAKECH 朝.

かの旅

山田 稔

新潮社版

山田　稔（やまだみのる）
昭和5年　福岡県門司市生れ
昭和28年　京都大学文学部仏文科卒
昭和44年　『幸福へのパスポート』『犬のように』
　　が続いて芥川賞候補となる
著書、『幸福へのパスポート』『教授の部屋』
　　『スカトロジア』他
現在、京都大学助教授、「VIKING」同人
現住所　京都市左京区下鴨東塚本町42

旅のなかの旅
昭和五六年九月一五日印刷
昭和五六年九月二〇日発行
著　者　山田　稔
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷　二光印刷株式会社
製本　株式会社　大進堂
定価　一一〇〇円

© 1981, Minoru Yamada
Printed in Japan

（乱丁、落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

《目次》

第一部　メリナの国で——ギリシア　……5
エコノミー・ホテル　オリンピアの一夜
ナフプリオン　メリナの国で

第二部　モハメッドとともに——モロッコ　……103
カティ探し　速く歩け　旅仲間
振り出しに戻る

第三部　ジョン・オグローツまで——スコットランド　……205
相も変らず　ネス湖のほとり　北の岬へ

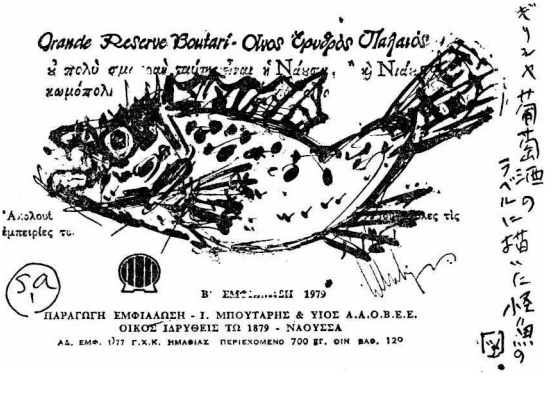
あとがき　……274

挿絵・装丁　阿部慎蔵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

旅のなかの旅

第一部　メリナの国で——ギリシア



ギリシャ産葡萄酒のラベルに描かれた怪魚

エコノミー・ホテル

日程も組まず、宿も定めずにある日ふらりと旅に出かける。その自由さと不安な気分とが、おそらくわたしにとって、旅の魅力の大半を占めているのであろう。

だが行先が未知の外国の場合、自由の割合はいちじるしく減り、その分だけ不安がふえる。心細さなどというのでなく、ときには怖じ気に近づく。それをこらえて、そして元来旅行好きどころか無精者の自分の尻、痩せた小さな尻に、ぴしり、ムチを当てる、まあそんな気持で出かけるのだ。

一体、何のために。それは実は自分にもよく解らない。強いていえば、心身の緊張を求めて。

この気まぐれな旅は、しかし概してうまくいったようだ。一人ぐらい泊れる場所は、どこにでも見つかった。言葉が通じなければ身ぶり、手ぶり、ときには叫び声まで発して、急場をしのぐことができた。

予約などせずに、ショルダー・バッグひとつ肩にかけて、気楽に、ふらりと。この文明社会に、行き倒れの心配はないのだ。——これが、当時、というのは今からもう十数年前の、わが旅の心得であった。

ところが、世界的規模での観光旅行の大衆化とともに、事情は変った。カメラや双眼鏡を肩にかけ、群をなして名所旧跡に押しかけるのはアメリカ人、日本人だけではなくなった。

部屋を予約して行った方がいい、とくにヴァカンスの時期には。——なに、平気だよ、とその忠告を無視できない。そこが寄る年波のつらさ——いやいや、まだそんなことをいう資格はわたしにはない。六十、七十と高齢化する観光客の間では、わたしなど一番若い口なのだ。

そうはいうものの、部屋がなければ駅で、あるいは夜行列車のなかで寝る、そんな勇ましい覚悟など、かけらほども持ち合せていない。そこでこのたびは、残念ながら「旅の魅力」を多少犠牲にしても、安全確実な道を選ぶことにきめ、まだ寒い三月のなかば、パリはオペラ座に近く、堂々店を構えるA旅行社の前を二度、三度行き来した挙句、ついにその硝子扉をわたしは押したのだった。

ギリシア旅行と聞くと、若い男の係員はすぐに資料を取り揃えてくれた。その、ずっしりとした豪華なパンフレットをめくると、どの頁にも、日焼けした美男美女のしあわせそうな裸の写真が、色鮮かにのっている。こんな場所にひとりで……、と早くも臆するこころを励まし励まし、平気を装ってつぎつぎと頁をめくっていると、そばから係員が、

「そこはトルコですよ」

「えっ、トルコ。なるほど。トルコもいいね。……でもそれはまたこのつぎ」

思案逡巡の末、折角出かけるのなら、ひとつ奮発して、と、エーゲ海島めぐり付十五日間コースというやつに決め、その旨係員に告げると、

「ホテルの等級はどれになさいます。A、B、Cとありますが」

かねてからわたしは、旅行をする場合の原則として、高級ホテルには泊らないことに決めていた。経済的理由はもちろんある。が、しかしそれ以上に、高級ホテルには個性が欠けているよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に思えるのだ。
その種のホテルはリッツにせよ、ヒルトンにせよ、コンコルド、あるいは日本の某ホテルにせよ――泊ったことがないので、あくまで想像の域を出ないが――それぞれの国のお国柄を感じさせることがない。アメリカ型というのか、能率と機能一点ばりで、どこの国、どこの都市でも同じ。つまり「顔がない」のである。
それに対し、わたしの体験に照していえば、ヨーロッパではCクラス、あるいはそれ以下のホテルでさえ、結構泊れるのだ。エレベーターがない、電話がない、浴室・便所は共同、暖房が不十分等々の不便はあるにせよ、部屋とベッドは清潔、そして何よりも嬉しいことに、人間味豊かな主人やボーイが客を迎えてくれる。
で、A、B、Cの三つの等級があると聞いたとき、咄嗟にわたしはCと心の中で決めたが、初めて訪れる国でもあり、念のためたずねてみた。
「Cクラスでも、大丈夫でしょうね」
「ええ、もちろん、Cクラスでもけっして悪くはありません」
と、係員は社の名誉を傷つけられでもしたような口調で応じた。
「なにしろ、ギリシア旅行にかけては、わが社はフランス一ですし、お客さまに、みすぼらしい思いをさせるようなことはいたしません」
まるで、おまえさんのような男の一人旅なら、Cクラスで十分だ、といわれているみたいな気がちょっとしたが、そんな僻みっぽい考えは抑えて、相手を信用することにした。Cクラスだって結構高いのである。それに個室を希望すれば、その分、割増金がつく。
だが、いまは金の持ち合せがない。そもそも、今日は資料をもらいに立ち寄っただけだし、もう少し検討してから出直そう。するとこちらの腹を見抜いたかのように、

「お決めになるのでしたら、今がぎりぎりですよ。復活祭のヴァカンスは混みますから」
で、結局、予約金としていくらかの額を払い込み、決めることになった。
「一週間ほどしたら、クーポン券が出来上ります」
いわれた通り、一週間ほど経って、残金を用意してわたしはA旅行社の扉をふたたび押した。そして十数枚の綴りになったクーポン券を受け取ったが、見ると、わたしがアテネで泊ることになっているホテルの名は「エコノミー・ホテル」というのであった。
エコノミー？　日本人であるわたしのために、特に選んだわけではあるまい。が、やはりCクラスだと、名前からして違う。いずれにせよこれは、アクロポリスを夢見る旅人の心を引き立たせる名前ではない。

ところで、わたしの参加した旅行は「団体」と呼ばれてはいるものの、日本風の「過保護」的なそれとくらべると、個人旅行に近いものであることが追々判ってきた。さすが、「自由」の国、「大人」の国フランスである。
出発の日の朝、「時間厳守」の注意を忠実に守って、定刻より早く、オルリ空港の「オリンピック航空」の標識の出ている窓口に行ってみると、旅行社の係員はおろか、航空会社の者の姿すら見えないのであった。
まだ早すぎるからだろうと、その場に佇んで待っていると、大きなトランクを二つ運搬車にのせた中年の男が、妻らしい太った女と一緒に近づいて来た。そしてわたし同様、不安げな視線を空っぽのカウンターに投じた後、
「ギリシア旅行はここですか」とたずねるので、
「そうです。あなたたちも？」

と応じてふと相手の胸を見ると、団体の名称を記した大きな青いバッジを付けているのだ。それで、この窓口はいくつもの団体の集合場所になっているらしいことが判った。

しばらくして、やっと航空会社の社員が二人、いかにも物憂げな足どりでやって来た。待ちかねたわたしは、そのうちの若い女性の方をつかまえ、A旅行社の名を挙げてたずねてみた。

「旅行社のものではないから、知りません」

と彼女はいかにも面倒くさそうにいうのである。

「ここで待ってたら誰か来るでしょう」

ちょうどその日は月曜日で、彼女の顔には週末の快楽の疲れの色がにじみ出ており、ときおり遠慮なく大きく口を開けてあくびをしたりするのを見ていると、この会社の飛行機は、今日、本当に飛ぶのかと疑わしくなってくる。

そのころには三、四十人ほどの客が集っていた。みな大きなトランクを二つも三つも持っている。旅の日数はわたしと大差ないはずなのに、荷物の量の何という違い。ショルダー・バッグ一つというのは、これはもう軽装を通りこして、軽率に思えてくる。

客のほとんどは中年、あるいは初老の夫婦連れで、せっせと貯めた金でヴァカンスに出かけるプチブルと見た。そして驚いたことに、みな胸に派手な色のバッジを付けているのだ。その色には三種類あった。つまりわたし以外に、少くとも三つの異なる団体が同じ飛行機でアテネに飛ぶらしい。

晴れがましいバッジを付けずに済んだことをわたしは喜び、またバッジなしの方が高級なのだと思い込もうとしたが、同時にまた、一体誰が自分の仲間なのか見分けがつかず、不安でもある。気のせいか、まわりの客は、わたしの胸にバッジがないのに気付くと、急に冷淡な表情になって遠ざかって行く。

やっぱり一つに群がっている方が、安心なんだなあ。
そのうち、一般乗客相手の業務が開始されたが、団体客の方はいつまでもほったらかしである。だがここに皆いるのだから、わたし一人が置いてきぼりを喰うことはあるまい。
ところが、定刻を過ぎてやって来た旅行社の係員の中に、A社の者はいなかった。わたしは焦った。バッジをくれる会社にしなかったことを悔いた。列をかき乱しつつよその係員のそばに近寄り、A社の人はいないか、とたずねてみたが、当然ながら、知らぬ存ぜぬの一点張りである。
A社の若い女がやって来たのは、三十分の幅をもうけて定めてあった集合時刻を、二十分あまりも過ぎたころであった。彼女もまた、前夜すこし楽しみ過ぎたのにちがいない。遅れたことについて一言も謝ることなく、わたしが性急に差し出すカードの氏名を、手にした名簿で確認すると、搭乗券を渡して立ち去ろうとする。
「待ってくださいよ。勝手に乗っていいんですか」
「ええ、どうぞ」
日本でのように、出発地から添乗員に引率されて行くものと思い込んでいたわたしは面喰らった。
「アテネではどうなるんですか」
「むこうでも、このマークをつけた人が（と上着のポケットからA社のバッジを取り出して見せ）迎えに来てます」
そう答えると彼女は出かかったあくびを噛み殺し、ちょっときまり悪そうに、わたしに向って笑った。
こうしてわたしは姿なき団体の一員として、言い換えるなら、旅の魅力であるはずの「自由と不安」を、しょっぱなからたっぷり味わわされながら、ギリシアへ旅立つことになったのである。

われわれいくつもの団体客を乗せたオリンピック航空のジェット機は、わたしの失礼な予想を裏切ってほぼ定刻に離陸し、イタリア半島西岸沿いに南下した。地中海は今日も晴れている。エメラルド色の海。海岸線をレース飾りのように縁どる白波。

イオニア海に出て、間もなく機首を北東に転ずると、別の海が見えて来た。エーゲ海にちがいない。するとあの陸地は、もうギリシア半島だ。パリを発って約三時間、定刻通りに走った場合の「ひかり号」の京都＝東京間の所要時間にほぼ等しい。

アテネには空港が二つあるらしく、われわれの着いたのは東空港だった。荷物の点検もなく税関を通過する。美男子の係官が着いたばかりのわたしに向って、日本語で「サヨナラ」といった。

団体とともに行動しておれば間違いあるまいと、わたしはバッジ組の後にくっついて出口の方へ向いながら、注意深く周囲に目を配った。こちらには何の目印もないのだから、A社のバッジを付けた係員を、わたしの方が発見しなければならない。

するとそのとき、鮮かなオレンジ色が目に飛び込んで来た。若い女性だった。あれだ、間違いない。オレンジ色はわたしの持っているクーポン券の表紙、およびクーポン券を入れておくビニール・ケースの色である。そして、いわばA旅行社のシンボル・カラーともいうべきオレンジ色の上っ張りの胸には、紛れもないA社の円いバッジ。

わたしは駈け寄り、ショルダー・バッグのポケットからクーポン券を取り出して示しながら、

「A社の方ですね」

とフランス語で話しかけた。すると相手の顔がぱっと明るくなった。

「ムッシウ・ヤマダ？　ようこそ。お待ちしていました」

彼女は、手にした紙切れの上でわたしの名前を確認してからフランス語でそういい、こぼれんばかりの微笑を浮べた。それから空港の出口の方へわたしを案内した後、この辺りで待っていてくれと言い残して姿を消した。

ギリシアに来て最初に接する女性の愛想のよさ、どこか東洋の血の混じっているような丸い感じ、当りの柔かさに、わたしは全身の緊張が解けるのを覚えた。

いったん落着きを取り戻すと、金のことを考えるゆとりが生じ、わたしは近くの銀行の出張所の窓口で、いくらかのフランをドラクムに換え、それからまた西陽の差す出口へ戻った。

アテネ空港は規模はさほど大きくなく、とくに到着口は空港の裏口といった感じで、建物の前の広場は、日本の地方都市の駅前といった印象をあたえる。

ちょうど駐車中の数台の観光バスに、わたしと一緒に運ばれて来たバッジ組の観光客が乗り込むところだった。やがてバスは一台、また一台と発車し、すると後は妙にがらんとしてしまった。本日の観光サービスはこれで終了、といった気配である。

わたしはあたりを見回した。わたしを運んでくれるバスはどこにいるのか。いや、そもそも、わたしの仲間はどこにいるのか。まさか一人だけの団体旅行でもあるまい。あるいはひょっとして、さっき出て行ったバスに乗るべきではなかったのか。

すると、風体のよくない男が近づいて来た。

「タクシー?」

「ノン」といって断る。

また同じような男がやって来て、「タクシー?」と誘う。今度は「ノウ」と断る。

そのうちに例のオレンジの制服を着た女性が、依然口もとににこやかな微笑を浮べて戻って来た。やっと出発、と思って荷物を持ち上げると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com